

*

これまで、何かまとめる度に、その「まえがき」、「あとがき」、「註」を活用するなり、本文中にきざりこませるなり、という仕方で、本論をはなれた“記号空間論”の構想一般に関する私の見解や観念そのほかを、のべてきた。しかし、そのようなやり方にも、限界がある。個々の主題に収斂しようとする論述の構成と、そのような主題に私を向かわせる心的力動を表明することとは、よしんば同じ根から出たものであるに違いないにせよ、もとより両立しがたし。そこで、この両者をとりあえず「別居」させ、非主題的な部分を、標題にあるような「月報」の形で、小文にまとめることにしてみたい。いま私が記して（読者が読んで）いるのは、そのな（い）め（て）の試みである。毎月出すわけでもないのに、「月報」もないものだが、そのへんは構わないことにさせてもらおう。

* *

内づらには、哲学などというと、堅苦しい雰囲気でも面倒臭い議論をするものと思ひこんでしまう傾向があるようだが、ちょっと考えてみれば判るように、ヨーロッパあたりでは、通りに面した茶店でやたら理窟っぽい連中がガヤガヤとヨタ語をしている、位のことでしか、ないはずなのだ。（勿体なくて、もってまわったような語をする手合に限って、奥はなんにもわかっていない、と考えるとまちがいはない。）そこで（ために）、形式とか形態とかいわふにかたちといい、有機的生命体とか自然としての人間とか欲求とかいわふに、いのちとしてみることにしよう。“記号空間論”を中学生（できれば、小学生）にも普及させるためには、こうしたことが、せひとも必要である。理論は、（もし、厳密で、かつ、正しいものを

あるならば）単純で、解りやすくなければいけないのだから。

まあもって言うべきことは、こうである：

(☆) 人(と)は、おのれのいのちに、かたちを与える（ようなものである）。

おおよそ、どんなものにも、かたちがそなわっている、と言えるだろう。そのかたちは、（いわば）はじめからそのものにそなわっているのであって、そのものとのかたちとは、ひとつになってある。いのちもまた、もののはたらきであるから、それにふさわしいかたちをそなえている——。ところが、人間だけは、かたちのないところから、かたちをつくりだすことができる。このようなことが、人のいのちのありかたなので、人のいのちのいとなみは、いのちにかたちを与えることである、といえるのである。

こうしてみると、人においては、いのちとかたちとは、もはやずんばりと結びつくわけにはいかなくなっていることが、わかる。なせなら、ただたんにいのちがもののようにあったのであれば、あるいのちとあるかたちとの結びつきは、運命的にもひと通りにかぎられてしまうのだが、かたちをうみだすこと自体がいのちのいとなみとなるならば、いのちがあるかたちと結びついたままもはやほかのかたちをうみださないとき、いのちはうしなわれてしまったことになるから、である。いのちは、ただたんにいのちとしてあるだけでは、いのちとして承らえるか、いのちとしてもつたえるか、いふれがしかない。いのちの刻々のいとなみは、そのようなものだ。いのちがよみがえるためには、いのちは、いのちと相反するもうひとつの秩序——かたち——を、積極的にわがものとあつたものでなければ、ならない。しかし、実際には、人がおのれのいのちにかたちを与えるかたちは、さきさきにおしとどめられてしまう。人にあつては、いのちとかたちとは、このような仕方ではあつていゝが、ないのだ。こうして、つぎのように言わなければ、ならない：

(★) いのちに、あたらしいかたちを与えることが、革命である

革命とは、いのちがあらたまることに、ほかならない。いのちが、それにふさわしい、あたらしいかたちをえて、よみがえることが、革命のもともとのありかたである。それゆえ、革命とは、人間のもっとも人間的なありかたである。人は、うまれながらにして、革命家である。

“記号空間論”は、いのちとかたちとの絡まりを解きあかす議論である。それゆえ、それは、人間および社会のさまざまなできごとを、まず、さまざまなかたちとしてえがきとることから、はじめる。それらのかたちは、いのちのあらわれであり、また、いのちのはてるところだ。したがって、“記号空間論”は、表現の理論であり、また、革命の理論である。

今回の「加工品の眩暈」は、いわゆる「言語的定在」をテーマとして論じる試みのうち、第1回目にあたる。

さまざまな事物の社会的性格については、前々から気になっており、「戦時論」とか「分類論」とかいった枠で考えていた時期もあった（→橋爪【1971】）が、6年ほど前から、「言語的定在」という名称のもとに、人工物を概念把握することにしてきた。

地下演劇

第4号 (1971年11月11日発行)

640頁 定価700円のところ、1000円にて。

執筆陣：石子順造／伊東守男／岩田弘／大槻昇平／
笠井敏／吳茂一／小林康夫／佐藤信／清水
多吉／高橋康也／高松次郎／堂本正樹／橋
爪大三郎／宮冬一彦／渡辺広土ほか多数。

残部 僅かにつき、おまとめの方はお早めにお申し出下さい

事物を論じることば、きりめて大切である。にもかかわらず、前世紀の Marx 以降、正面からこの主題を扱った、際立った議論がほとんど見当たらないように思われるのは、どうしたことなのだろうか？ 手紙にある書物のなかで、これに関連するのは、M. Foucault の『言葉と物』、廣松渉の『世界の共同主観的 存在構造』ぐらいではないか、と思う。『言葉と物』の方は、大冊なので、まだ目を通していないが、廣松の本は、ぱらぱら前の方を見てみた限りでは、（「トルソーである」旨本人がことわっている点を勘引いて考えても）思いのほかにつまらぬ道見立ての本で、いさすかがっかりさせられた。（言語的定在について、2回、3回と論を重ねるうちには、いずれこの両書に、みっちりおつきあい申しあげることになるかもしれない。）

というわけで、徒手空拳、天井を睨んで呻吟しながら、机上の宣を漂う依^{エーテル}的兒をキバがみにして紙の上のしみにしてしまおう、とでもいうようなまねをしながら、論旨をひねりだすほかなかったの、まとめるまでに予定の3倍も経過してしまった。

今回の論述の具体的な諸点については、諸賢の批判をおおがなければならぬ（首を洗って待っている）。しかし、言語的定在に関する議論が、自然と人間との交渉を考える上で、全く基本的であることは、私の確信するところである。というのは、文明の実体とは言語的定在である、と言っても、言いすぎではないだろうから。言語的定在論は、今後、当然そのさまざまな特殊領域での研究のなかで鍛えられていかなければならぬだろうが、おそらく、技術論を論じるにも、図象学を論じるにも、映像論を論じるにも、記号学を論じるにも、音楽論を論じるにも、絵画論を論じるにも、文学表現を論じるにも、そのほかの議論においても、人は、言語的定在の概念をふまえておくことが不可欠だ、と思う。

最近気がついて確かめてみたところ、私が現在までに、社会理論に関連してまとめた文章の累計が、ほぼ 3000 枚に達したらしい。これは、過去 6 年間の分であるが、これから、いままでのように悠長に構えてもいられないので、仕事のロッキンをあげていこうと、気をひきしめている。なお、ちなみに、この間の活字化率は、4.3% にあたる——すなわち、いままで書いたものの 95.7% は、公表されていない。別に、そうなることを好んでいるわけではないが、今後も暫らくの間は、この活字化率は低下をうけていくことになるだろう。

今後の予定について。

この『加工品の眩暈』は、12月2日(金)に言語研究会で報告し、批判をあおぎたいと思っている。そのときまでに、できれば、『言葉と物』や廣松理論を follow して、討論に実行きをもたせたいと思うが、余裕があるかどうか。(私の感じでは、廣松理論には、三回つとむからの密輸入が若干あるように思われる。)

この論文については、『記号空間論』といわゆる「機能理論」との関係と明瞭にするために、『構造=機能理論の射程と限界(仮題)』をまとめてみるつもりである(これも、いまごろには、とくに仕上がっていったはずのもの)。そのあと、残る年内は(と言っても、もう残り少ないが)、『言語的存在論』、『失語/失行論』、『精神医学』関連の材料あつめと下調べを急ぐ一方で、『貨幣論』の準備にとりかからねばならない。『ソシオロギス』2号(メ切は来年2月10日が?)には、先にまとめた『記号空間論(表題)』を改稿、圧縮の上、投稿するつもりなので、年が明けたら、あぐされに手をつける予定である。

- Foucault, Michel 1966 Les mots et les choses: Une archéologie des sciences humaines Gallimard, 渡辺一民・佐々木明訳『言葉と物——人文科学の考古学——』, 1974, 新潮社。
- 橋爪大三郎 1971 『演劇的人類学』『地下演劇』4: 485-465。
- 廣松 渉 1972 『世界の共同主観的存在構造』勁草書房。
—— 1975 『事的世界観への前哨: 物象化論の認識論的・存在論的位相』, 勁草書房。

今回の小論や、『記号空間論』の作業全般について、さまざまな立場の方々からの、意見、批判、そのほかを、切望しています。

時限がきているので、いまあい、出席するつもりであったゼミや研究会に出かけることを禁欲しなければならぬ場合が、最近ふえきています。しかし、同僚の皆さんが何をしているかについては、なるべく詳しく知りたいと思っているので、レシメなど余力のある場合には、私の Mail Box に書いておいていただくと、嬉しいです。いただいたレシメには必ず目を通し、つぎの機会に活かせるように心がけています。また、コメントが必要な場合には、ちよと書きとえておいていただければ、必ずお返答します。

橋爪大三郎(はしづめ だいさぶろう)。

〒248 鎌倉市村木座5-9-11

PHONE 0467-22-1030

振替 〓 横浜 51782